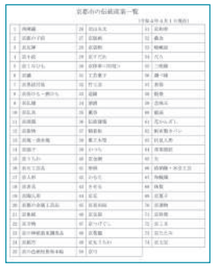
こんな学び方もあるよ！



京都市の伝統産業 一覧



全部で74品目！
調べ学習などで
使おう。

伝統産業製品多言語カード



色々な言語で
伝統産業製品
を説明しよう。

マンガできものを知ろう



伝統産業の日

京都市では、毎年春分の日を「伝統産業の日」と決め、多くの市民や観光客のみなさんに、京都の伝統産業の魅力を知っていただくため、市内各地でさまざまなイベントを実施しています。

ホームページ https://densan.kyoto/





わたしたちの伝統産業 ―1200年を越える京が育んだ手づくりの文化とこころ―

令和８年８月　発行

発行：京都市産業観光局クリエイティブ産業振興室･京都市教育委員会指導部学校指導課　　協力：京都市小学校社会科教育研究会

京都市立	学校
年　組	名前
年　組	
年　組	

京都の伝統産業 Traditional Industries of Kyoto

DO YOU KYOTO? 2050

京都市 CITY OF KYOTO

京都市印刷物第081055号

令和
8年度版

わたしたちの伝統産業

1200年を越える京が育んだ手づくりの文化とこころ



京都市産業観光局　京都市教育委員会

「わたしたちの伝統産業」の使い方

■社会科の学習で使います

4年　京都再発見！

京都府の特色のある地域の学習の後に、わたしたちの暮らす京都市の特色について調べます。

京都府の他の地域と比べることで京都市の特色がより分かりやすくなるのではないでしょうか。

「歴史や文化が豊富である」、「国際交流が盛んである」ことに加え、京都市の特色として「伝統的な工業が盛んである」ことがあります。京都市ではどんな伝統産業製品が盛んに作られているのでしょう。また、いつごろから作られているのでしょう。そして、だれが、どのように作っているのでしょう。それらの問題について調べるときに「わたしたちの伝統産業」を活用します。







■総合的な学習の時間でも使えます

京都市の伝統産業について さらに詳しく調べよう

自分が調べたい伝統産業製品を選び、作り方や歴史などについて調べます。

調べたことについて意見交換し、京都市で伝統産業が盛んな理由やこれからの伝統産業について考えます。



■自由研究や自学自習にも使えます

休日に家族と一緒に 調べてみよう

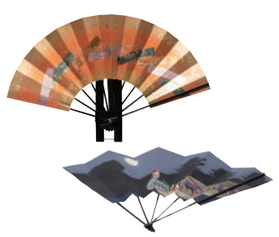
京都伝統産業ミュージアム(29ページ)に行ったり、行事に参加したりするのもいいでしょう。冊子と実物や実演を見比べて気付いたことをメモに書き、自由研究としてまとめます。



■学習の手順

見つける

「わたしたちの伝統産業」を読みながら、教科書にのっているものや学校や家にある伝統産業製品を見つける。





調べる

伝統産業製品の種類、作り方、職人さんのおもいなどを「わたしたちの伝統産業」などを使って調べる。







まとめる

調べたことをまとめる。



（伝統産業新聞）



（伝統産業かるた）

もくじ

「わたしたちの伝統産業」の使い方…… 1

京の暮らしと文化を育んだ伝統産業 …… 4

伝統産業って、いったい何だろう？ …… 5

いくつ知ってた？京都の伝統産業製品 …… 7

まだまだこんなにある！京都の伝統産業製品 ‥ 11

［わざの研究①］西陣織 …… 17

［わざの研究②］京友禅 …… 19

［わざの研究③］京焼・清水焼 …… 21

［わざの研究④］京仏壇・京仏具 …… 23

［わざの研究⑤］清酒(日本酒) …… 25

このままでは
京都の伝統的な文化がなくなる！？…… 27

これからの伝統産業のために …… 28

京都伝統産業ミュージアム …… 29











京都は伝統産業のまち。
私たちの身のまわりには、
いろんな伝統産業製品
がいっぱい!
まず、伝統産業のあらまし
を知って、次に、きものや
焼き物などの作り方を学
んでみよう。



広報キャラクター　京乃つかさ
©CITY OF KYOTO 2021

京の暮らしと文化を育んだ伝統産業

京都は平安時代から江戸時代まで1000年の長きにわたり、都であり続けました。そのため、京都にはさまざまな人が集まり、長い歴史のなかで独特の文化を作り上げてきました。

この独特の文化を支えるために大きな役割を果たしたのが、京都の伝統産業です。伝統産業とは伝統的な技術と技法で、日本の文化や生活に結びついている製品などを作り出す産業のことです。その高い技術は京都だけにとどまらず、日本の文化を形作るうえでも重要な基礎となりました。長い歴史のなかで、京都は戦乱［応仁の乱(1467～1477年)］によって町の大部分が焼失したり、都が東京へ移ったりする［明治2(1869)年］など、大きな苦難や変化を経験しました。しかし町を愛し、伝統産業を守り続けた多くの職人さんたちによって、伝統産業は今日に受け継がれているのです。

毎日使っているお茶わんや、お家のタンスに大切にしまってあるきものなど、伝統産業製品は私たちのくらしのさまざまな場面に見ることができます。皆さんが知っている京都の伝統産業にはどんなものがありますか。この冊子で探してみてください。



クイズ

左の写真の中に
いくつ伝統産業製品が
あるか探してみよう！



こたえは30ページ

伝統産業って、いったい何だろう？

わたしたちの身のまわりには、「古くからあったもの」、「新しくできたもの」と区別できるものがたくさんあるはずです。そのなかには、それぞれの土地で昔から伝わってきた技術を使って、一つ一つ手作業で作られているものがあります。それらは、伝統産業製品と呼ばれるもので、織物・染物・焼物・仏壇・仏具・漆器・木工品・人形などがあります。

伝統産業とは、伝統的な技術と原材料を使ってこれらの伝統産業製品を生産する産業のことです。全国各地には、伝統産業製品がたくさんあります。それぞれの土地の気候風土をうまくいかして作られ、今なおたくさんの人が日常生活のなかで愛用しています。伝統産業には古いものを伝えるだけでなく、その良さを次の世代に引き継ぐ役割もあるのです。

全国の伝統産業と京都

伝統産業製品は、手作りで心を込めて作られるので、あたたかみがあり、機械による生産では出せない味わいをもっています。

国では、昭和49(1974)年に法律を作り、これらを伝統的工芸品に指定するしくみを設けています。全国には国が指定した「伝統的工芸品」が244品目あり(令和7(2025)年10月現在)、「伝統マーク」を作って、守り育てています。

そのなかで、京都には国から指定を受けた伝統的工芸品が17品目（令和8(2026)年7月現在）もあります。全国的に見ても伝統産業がたいへん盛んな地域です。


京友禅


京扇子


京漆器

伝統マークとは？

国が指定した伝統的工芸品につけられるマークのことを「伝統マーク」といいます。職人さんのほこりと責任をあらわしたもので手作りのものにしかつけられません。




つづれ織（西陣織）


仏像彫刻（京仏具）


焼物の成形（京焼・清水焼）

いくつ知ってた？
京都の伝統産業製品

京都の伝統産業は、人々の生活用具として、また宗教の儀式用品、趣味や遊びの用具として発展し、今なお多くの伝統産業製品が作られています。

昭和49(1974)年に、全国各地の伝統産業を守り育てていこうと「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」(伝産法)が制定されました。現在、京都には、この法律に基づいて国から指定されている17の伝統的工芸品があります。



西陣織

5、6世紀頃、渡来人の秦氏が養蚕・機織りの技術を伝え、平安遷都以後に現在の上京区を中心に発展してきました。西陣織には多くの種類があり、色糸を使った華やかで美しいものがたくさんあります。帯のほか、きものや能装束、金襴、ネクタイ、インテリアなどを生産しています。

西陣織



京小紋

江戸時代に武士が着ていた裃(正装)がもとになっており、17世紀頃までにはほぼ完成された染めの技法です。最初は単色が主体でしたが、その後、多色へと変化し、友禅と影響しあいながら、京都では京小紋として独自に発展してきました。

京小紋



京くみひも

絹糸を組み合わせて作る紐で、帯締めや羽織紐などが主に作られていますが、その種類は80種近くあります。奈良時代に中国から伝わった組紐は、京都では平安時代に工芸品として人気を集め、江戸時代には庶民にも広まりました。

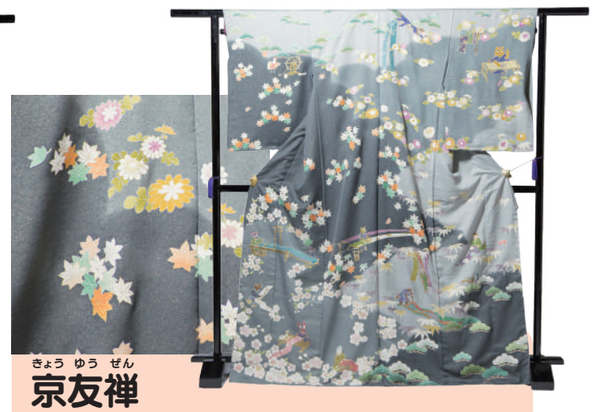
京くみひも



京鹿の子絞

きものや帯揚げなどに使われる染色技法の一つで、平安時代からあります。江戸時代以後「かのこ」という名前で広く愛用されました。生地を細い糸でしばってしめる技法で、凹凸の立体感がある生地に染めあがるのが特徴です。

京鹿の子絞



京友禅

江戸の元禄年間に扇絵師の宮崎友禅斎が創案したと伝えられ、あらゆる模様をきものや帯に華麗に染める技法で、現在では刷毛や筆を使って模様を描き染めていく「手描友禅」と型紙を使って染めていく「型友禅」があります。

京友禅



京繍

京繍とは、1200年以上の歴史を持つ日本刺繍のことです。平安貴族のきものや武具(武士の使う道具)などに活用され、発展してきました。絹や麻の織物に、絹糸・金糸・銀糸などを用いて模様を描く刺繍には、20種近くの技法が使われています。

京繍



京黒紋付染

京黒紋付染は、婚礼のときに着る黒留袖や、葬儀のときに着る喪服などに使われます。色の深みを出すために赤や青に染めてから黒色に染め、紋章を染め抜く伝統技術です。京黒紋付染のきものは、上品で深みのある黒色と紋章の正確さと美しさが特徴です。

京黒紋付染



京都の伝統産業製品の動画が見られるよ。

GIGA端末やスマートフォンなどのカメラで読み込んでみよう。



京仏壇

江戸時代初期の宗門改め制度に伴い、仏壇が各家庭に普及しました。それ以来、高度な技術でわが国最高の品質をほこっています。松・檜・杉などの木地に漆・金箔・銀・銅・真ちゅうなどを使い、多くの工程を経て作られます。

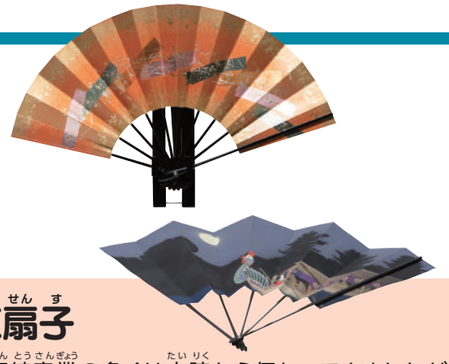
京仏壇



京漆器

木地に漆を塗ったもので、平安時代に中国から伝わった技法をもとに、独自の技術を確立しました。室町時代には名工もあらわれ、茶道とともに発展しました。椀や盆などの食器類をはじめ、茶道具類や家具などがあります。

京漆器



京扇子

伝統産業の多くは大陸から伝わってきましたが、扇子は9世紀ごろ日本で生まれ、貴族のあいだで用いられ発展をとげました。涼しさを呼ぶ夏扇のほか、舞扇・能楽扇・板扇・飾扇・茶扇など多くの種類があります。

京扇子



京都の伝統産業製品の動画が見られるよ。

GIGA端末やスマートフォンなどのカメラで読み込んでみよう。

京石工芸品

石工芸の歴史は古く、平安時代に京都に都がおかれたことを機会に宮廷や寺院の建設とともに石の工作が盛んになり技術も発展しました。石仏・石灯ろう・石鳥居などが作られています。

京石工芸品



京仏具

11世紀初頭に七条に「仏所」が設けられて以来、その歴史は1000年以上におよびます。主に寺院の内装に使われますが、家庭で使うものもあり、多くの種類があります。技術も木工・金工をはじめ伝統的な手工業によって作られます。

京仏具



京指物

指物とは板を組み合わせて作る家具や道具のことで、平安時代の宮廷文化から生まれました。その後、室町時代には専門の指物師も現れ、発展しました。たんす・机・飾り棚などの調度指物と茶道具があります。

京指物



京表具

表具とは掛軸・びょうぶ・ふすま・巻物などをまとめて言うものです。古くから京都を中心に発展し、日本建築と深い関係をもっています。その技法は平安時代に中国から伝えられ、中でも掛軸は室町時代に高度な技法が完成しました。

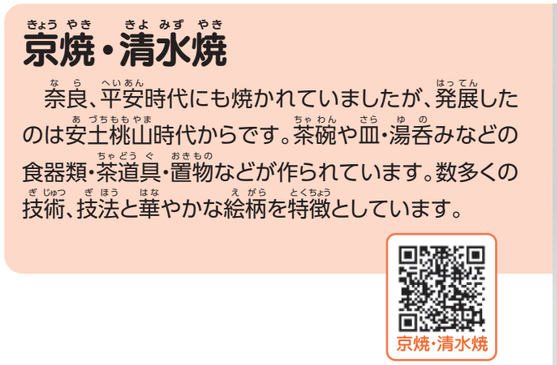
京表具



京うちわ

室町時代に、中骨と柄が一本の竹で作られたうちわが、朝鮮半島から西日本にもたらされました。頭と柄を別々に作り、あとから柄をさしこむのが特徴の京うちわは、絵師による絵がつけられ、徐々に広まっていきました。

京うちわ



京焼・清水焼

奈良、平安時代にも焼かれていましたが、発展したのは安土桃山時代からです。茶碗や皿・湯呑みなどの食器類・茶道具・置物などが作られています。数多くの技術、技法と華やかな絵柄を特徴としています。

京焼・清水焼





京人形

平安時代の宮廷の雛人形が始まりで、江戸時代から盛んに作られるようになりました。京人形として知られているものには、雛人形をはじめ、五月人形・浮世人形・市松人形・御所人形などがあります。

京人形

まだまだこんなにある！
京都の伝統産業製品



国から指定されている17の伝統的工芸品のほかにも、京都には歴史と伝統に育まれた多くの伝統産業製品があります。

これらは京都の人々の生活に深い関わりをもつもので、工房やお店などが町じゅうのいたるところにみられます。周辺の豊富な自然や資源を用いた産業は、どれも京都の歴史が育んだ大切な財産です。

京七宝



七宝は金属(金・銀・銅)の上に、ガラス質の釉薬をのせ、約750度で焼き付け作ります。安土桃山時代に宮殿を飾った技法で今も花瓶や額絵等が作られています。

京房ひも・撚ひも



神具・仏具・武具などさまざまな道具のかざりに使われます。華やかさや厳かさを表現する京都ならではの伝統工芸です。

京象嵌



京象嵌は、鉄・銅などに細かく溝を彫り、金・銀・銅などを槌で打ち込んでいくもので、繊細な美しさが特徴です。

京象嵌

京陶人形



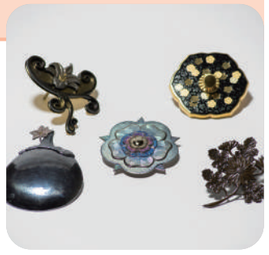
粘土を材料とした素朴な土の人形が発達したもので、最近は土の素材の美しさと京都らしさを強調したものが多く作られています。

京刃物



現在でも、家庭用から西陣織・京版画・木工・竹工などの作業用や、華道の道具など幅広く使われています。

京都の金属工芸品



銅などの金属に表面加工をした工芸品で茶道具・華道具・神仏具などがあります。

京都の金属工芸品

京の神祇装束調度品



「神祇装束」とは平安時代ごろ、位の高い人が身につけた衣服のことです。「神祇調度」とは神社の祭りや儀式のときに使われる用具のことをいいます。

京都の伝統産業製品の動画が見られるよ。
GIGA端末やスマートフォンなどのカメラで読み込んでみよう。

京銘竹



恵まれた気候風土に育まれた良質の竹そのものの持ち味をいかした京銘竹は、庭園や茶室の建築材料として、門や垣などに使われています。

京すだれ



神社・仏閣・料亭などの多い京都ならではの工芸品として受け継がれ、現在でも手作りのすだれのほとんどが京都で生産されています。

京の色紙短冊和本帖



和紙を金泥や金銀箔を使って飾った色紙・短冊は、古くから京都の特産品として発展しました。現在も昔ながらの技法が伝えられています。

京の色紙短冊和本帖

京印章(印刻)



京都の印章は平安時代に天皇の印などの制作からはじまりました。印章最盛期の中国・漢の作風を受け継ぎ、高い技術をもっています。

北山丸太



北山杉を原料に生産される北山丸太は、現在でも床柱や室内のかざりには欠かせない和風建築の材料となります。

工芸菓子



粉砂糖などを混ぜ合わせた生地で花びらや葉などを作るもので、美しい形と色で四季を表現した京都らしい工芸品です。

京版画



京版画は、出版文化との関わりが深く、江戸時代に、浮世絵や挿絵入りの物語の広まりとともに発展しました。

京版画

京竹工芸



恵まれた気候風土に育まれた良質の竹材を使う京都の竹工芸品。華道具や茶道具、室内のかざりなど幅広く使われています。

京竹工芸

京袋物



紙入れ・たばこ入れ、手さげなどの袋物は、西陣織や京友禅などの生地を使った「京みやげ」として人気があります。

造園



京都の造園は、自然の風景を写しとり、石・木・草など一つ一つに意味が込められているのが大きな特徴です。

京都の伝統産業製品の動画が見られるよ。
GIGA端末やスマートフォンなどのカメラで読み込んでみよう。

清酒



良質の地下水と気候風土に恵まれた京都では、古くから酒造りが行われ、伏見は日本有数の酒どころとして知られています。

かつら



頭の形に合わせてアルミまたは銅板で型を作り、網状のもの(チール)に毛を1本ずつくくり付けて型に貼って作り上げます。

京瓦

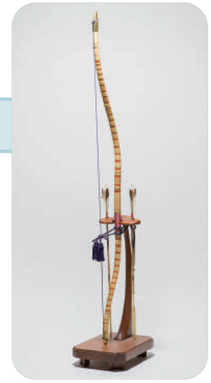


京瓦の種類は鬼瓦・軒瓦など700種類にものぼり、寺院や神社、茶室の数寄屋から町家などに幅広く使われています。

京丸うちわ



夏に花街で芸妓さん・舞妓さんがお得意様に挨拶するときに配るもので、表面に紋どころ(マーク)、裏面に芸妓さん・舞妓さんの名が刷られたうちわです。



薫香



仏教や茶道の中心地京都では、線香や焼香・匂い袋などさまざまな製品が作られ、香りの文化は海外からも注目を集めています。

京金網



湯豆腐すくい・焼き網・茶こしなどの台所用品のほか、料理のうつわとしても利用されています。

京金網

京真田紐



京指物の桐箱などにかけられている紐のことで、自然の草木で染めた糸を使って織りあげる美しい模様が特徴です。

京真田紐

京弓

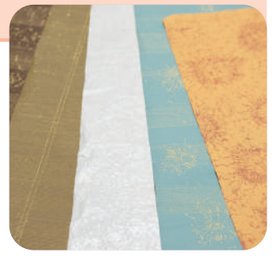
宮中や伊勢神宮に納める儀式用のほか、現在は弓道に使う稽古弓が生産の中心となっています。

伝統建築



大工や板金、左官、建具などにより古くから伝えられた技で、自然の木を使い造りあげる伝統建築。自然の木の美しさをいかして強くつなぎ、風や地震にも耐えられるものです。

唐紙



唐紙は、もとは唐から伝わった細工紙のことでしたが、後に襖に使う紙を指すようになりました。神社仏閣や茶室などに多く使われています。

京足袋



伸び縮みの少ない木綿の生地を使って作る手作りの京足袋。はき心地の良さ、丈夫さで根強い人気があります。

京足袋

京和傘



京都の和傘は、高い技術と優雅な仕上げで、番傘・蛇の目傘のほか、神事・仏事や店などのかざりにも使われています。

京和傘

額看板



木地に毛筆で書いた原稿を貼り、字の部分を上から彫刻刀で彫っていきます。色を塗るか、あるいは漆を塗って金箔を押して仕上げます。

かるた



百人一首・花札などのかるた類には、多くの種類があり、そのほとんどが京都で作られ、全国に出荷されています。

かるた

京つげぐし



黄楊の木で作った櫛は、髪の通りがよく、地肌を傷つけないため、今も多くの人々に使われています。

截金



金箔を細く切って仏像や仏画などに貼りつける技術です。筆で線を描くよりも耐久性にすぐれています。

菓子木型



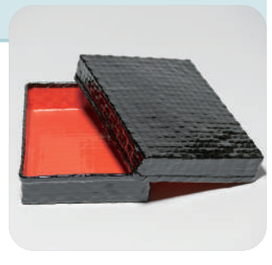
桜の木を材料とした、京菓子づくりに欠かせない押し菓子用の木型です。

きせる



竹で作った管に金属を取り付けた喫煙具で、最近はあまり使われなくなりましたが、茶道具・骨とう品として愛用されています。

京葛籠



葛籠とは、竹の編籠に和紙を張り、柿渋などを塗って仕上げたものです。衣服などの収納に使われます。

嵯峨面



粘土で作った原型に石膏を流し込んで型を取り、和紙を何枚も張り重ねます。型からはずして乾燥させたあと、墨や朱を塗って仕上げます。

京都の伝統産業製品の動画が見られるよ。
GIGA端末やスマートフォンなどのカメラで読み込んでみよう。

尺八



管楽器で主に邦楽に使われています。乾燥させた竹に音程に合わせて穴をあけ、漆や石膏などを内部に塗って音をととのえます。

尺八

三味線



原木をていねいに削って形を整え、磨き、漆を塗ってつやを出します。胴の部分に皮を張る工程が良い音色を出すのに最も重要な工程です。

調べ緒



鼓や太鼓の両面のふちにかけて胴に結びつけるひものことで、音の調整の役目をします。能や歌舞伎などで使われています。

珠数



珠数は、仏教の広がりとともに多く使われるようになりました。お寺がたくさんある京都では、古くから珠数の製作が盛んです。

茶筒



銅やブリキを使った手づくりの茶筒は、約130の工程を経てできあがります。長く使うほど色が変化していくのが特徴です。

茶筒

提燈



京都の提燈は、一定の長さに切った竹を一周ずつ止めていく、独特の作り方が特徴で、今も神仏具などに使われています。

念珠玉



玉の種類は木やガラス、石などさまざまなものがあります。数は基本的に108個で、その一つ一つには意味が込められています。

能面



能面は大きく分けて70種類あります。素材の檜をのみや彫刻刀で手彫りし、裏には漆、表には白い顔料を塗り、唇、目、眉、髪などを描きます。

花かんざし



女性の髪をかざる花かんざしは、その華やかさややわらかな風合いに特徴がある、京都独特の工芸品です。その技法は、つまみ細工を中心に造花や銀花、金糸などがあります。

帆布製カバン



厚手の綿帆布・麻帆布を一枚ずつハサミで裁断し、ミシンで縫っていきます。金具の取り付けなどの仕上げもすべて手作業です。

伏見人形



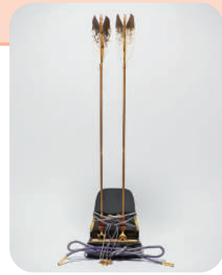
江戸時代から作られている土人形。二つの型に粘土を押し込み、少し固まったら合わせて乾燥させ、窯で焼き、最後に色を付けます。

邦楽器絃



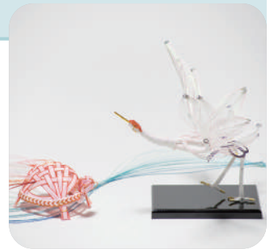
雅楽器や琵琶、三味線など邦楽器の絃のことで、生糸で作られます。用途に適した一定の音色を保つために、高い技術が必要です。

矢



武家や公家の日常的な道具として使われてきました。明治以降は儀式やかざりに使う有職式矢、弓道に使う稽古矢が生産の中心です。

結納飾・水引工芸



自然の風物を限られた材料で美しく表現する水引細工には、金封などに使われる平かざりと、結納用の豪華な立体かざりがあります。

和蝋燭



和蝋燭は、植物性の原料のみを使っているため、すすが少なく、清らかな炎が特徴です。仏教など宗教的な行事に使われます。

和蝋燭

京菓子



京菓子は、生菓子・半生菓子・干菓子に大きく分けられます。祭事などに使う儀典菓子や、季節ごとに楽しむ季節菓子など、私たちの生活に密着しています。

京漬物



京都の漬物も古い歴史を持っています。800年前の記録にも残っているほどで、今も伝統的な製法で作られています。

京料理



京料理のもとは、貴族や寺院、茶の湯の世界などに、そのルーツをみることができます。素材のよさを十二分にいかし、うす味であってもコクのある旨さが特徴です。

京こま



安土桃山時代ごろに、上流階級の女性たちの遊び道具として作られたのが始まりで、きものの布を巻いて色彩豊かに美しく作られた、室内で遊ぶためのこまです。

京たたみ



全国的に機械による製造が進む中で、古くから畳製作の高い技術を持つ京都では、今も手縫いによる伝統的な技術が受け継がれ、多くの畳が作られています。

西陣織

京都の伝統産業を代表する「西陣織」。先に染めた糸を使って模様を織りだす織物(先染の紋織物)のことで、その技術は世界最高といわれています。


つづれ織

伝統産業まめ知識

「能装束」

日本の伝統芸能である能で着る装束も、西陣織で作られています。その他にも、自動車や新幹線のシートにも西陣織が使われています。



職人さんのおもい

製織（お仕事について 57年）

織っている帯が少しの間違いもないように気をつけて織っています。西陣の帯は、多くの工程を経てはじめて完成します。わたしたちの努力と苦労が詰まっています。

西陣織の歴史


職人尽絵屏風(室町時代)

西陣織の歴史は古く、今から約1200年前の平安京に設けられた織部司(朝廷の織物を作る役所)がもととなっています。そこで織っていた人たちが、鎌倉時代には京都の町の西北部(現在の西陣近辺)に移り住んで仕事をするようになったのです。

西陣という名前がついたのは室町時代のことで、応仁の乱のとき、西軍の大将だった山名宗全がこのあたりに陣を置き、戦禍を避け、散り散りになっていた職人たちが乱後、再びこの地に戻り、織物を復活させたことから、「西陣」の呼称がつきました。それ以来、このあたりで織られる織物を西陣織と呼ぶようになったのです。そして、織手たちはこの地に根をおろし、伝統を守り続けてきました。


フランスのリヨンに留学した技術者たち

都が東京へ移された明治時代以後は、京都の活性化を願う町衆のおもいもあって、いち早く技術者をヨーロッパに送り、新しい装置を取り入れるなど、日本の近代化とともに機械化を積極的に進めました。

西陣は日本一の帯生産地

西陣は伝統的な手仕事を大切にするものづくりを続けるいっぽうで、常に新しい技術を取り入れています。

帯やきもの・金襴・ネクタイ・ショール・インテリア製品など、西陣ではあらゆる織物を生産していますが、最も多いのは帯です。西陣織の約67%の機屋さんが帯を生産されており、西陣は日本一の帯生産地です。

西陣織のできるまで

西陣織は何千本ものたて糸とよこ糸が交差して出来上がります。西陣織が製品になるまでには、多くの工程を必要とします。

これらの工程はほとんどが分業になっていて、それぞれ専門の職人の手で行われていますが、大きくは「企画・製紋」「原料準備」「製織準備」「製織」「仕上げ」の各ブロックに分かれています。

デザインを描く人、その柄をもとにたて糸とよこ糸の組み合わせを織機に指示する織物情報を作る人、糸を染める人、「整経」といってたて糸を準備する人、「綜絖」といってたて糸を引き上げる装置を準備する人、織機で織る人など、多くの人々の手を通って完成するのです。

このように西陣織はいくつもの工程を経て完成しますが、これらすべての工程が熟練した職人さんによって、ていねいに作業されています。

そして現在、伝統の技を守りながら電子機器を導入した新しい技術も取り入れられています。西陣織が日本だけでなく世界的な織物としてほめたたえられているのは、実にこうした人々の心と技のおかげなのです。

企画・製紋工程

図案 → 紋意匠図 → 紋紙・電子データ




織物の設計図にあたる


織機に取り付けられた紋紙

西陣織が出来るまでを説明します

製織工程

製織


技と勘を結集し、たて糸によこ糸を一本一本通して、手機で織っているところ

仕上げ工程

仕上げ → 完成


完成品

原料準備工程

生糸 → 撚糸 → 精練 → 糸染

まゆから取り出した生糸に撚りをかけて、強さや風合いを出し(撚糸)、表面のよごれやセリシンを落として、染めやすくする(精練)。


熱い染料液に浸して糸を染める

製織準備工程

たて継ぎ ← 整経 ← 綜絖


必要な長さと本数にたて糸をそろえ、織機にかける筒に巻きとる


たて糸を引きあげる装置

●西陣織工業組合 TEL. 075-432-6131

京友禅

西陣織とならんで京都の伝統産業を代表するのが「京友禅」です。「友禅」とは模様染めのことです。布を染める技法は古くからありましたが、京都で友禅染と呼ばれる模様染めが広がったのは江戸時代に入ってからです。



伝統産業まめ知識

きもののお手入れ

多くの職人によって作られたきものは、着た後のお手入れも大切です。染色補正師は、素材や染織技法、汚れやシミについての豊かな知識と経験、高い技術を持ってお手入れします。また、染織加工中や流通過程での故障の修理も行います。

職人さんのおもい

手描友禅(挿し友禅)（お仕事について 48年）

京友禅の職人はいつも「どうやったら着る人が素敵に輝くだろう」と考えながらきものを作っています。成人式などの機会に日本の民族衣装「きもの」を着て輝いて欲しいです。

京友禅の歴史

江戸時代の中ごろ、宮崎友禅斎という扇絵師が模様染めをデザインしたのが友禅染の始まりだといわれています。「友禅染」という名称はこの友禅斎から名付けられました。


京友禅を考案した宮崎友禅斎

江戸時代の友禅染は、現在の「手描友禅」の基本となっており、白い生地に下絵を描いて糊(防染糊)を置き、筆や刷毛を使って模様を染め分けていきます。

一方、型紙を使って模様を染める「型友禅」は、明治時代に「写し糊」を使って効率よく染めることができる「写し友禅」の技法が考案されたことで大量生産が可能になり、友禅染は一般に広まりました。

多くの人々の手をとおる京友禅

現在では、「手描友禅」と「型友禅」をあわせて京友禅と呼んでいますが、これらはすべて高い技術をもった職人の手作業によるもので、一枚の白生地から友禅が出来上がるまでには多くの工程を必要とします。

これらの工程は分業になっていて、京都にはたくさんの専門職人がいます。この分業生産体制が高い技術を伝え、良い製品作りを受け継いでいるのです。

伝統産業まめ知識

きものをどうして「呉服」というの?

3世紀の初めごろ中国から来た機織の女性を呉服と呼んでいました。それがしだいに中国の呉の国から来た衣服の意味になり、やがて絹の衣服をこう呼ぶようになりました。最近では「和服」という言いかたもありますが、意味は同じでみな日本で発達したものです。

京友禅のできるまで

手描友禅の工程

図案

下絵

どのような柄のきものをつくるか考えられた図案をもとにして、白い生地の上に青花という特殊な色素を使って下絵を描いていきます。



糸目糊置

下絵の細かい輪かく線(糸目)の上にゴム糊を置いていきます。糊はとなり合った色と色がまじらないよう、防波堤の役目を果たします。



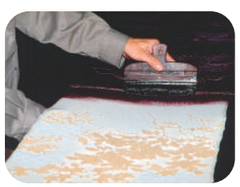
伏せ糊置

模様の部分は、そのままにしておくと次の地染め工程で地色が入ってしまいます。そこで、模様部分全体を糊でおおっておきます。



地染め

模様の部分以外の生地全体を染めます。生地の両端を引っぱって空中につるし、大きな刷毛で染める「引染」という技法で染めます。



蒸し・水洗

染めた色が生地から落ちないようにするために大きな蒸箱に入れ、平均98度という高温で20分から50分蒸し、水で洗います。



挿し友禅

染料の色合わせをし、模様部分に刷毛や筆を使って、色を入れていきます(色を挿すという)。友禅染独特の細やかな色彩はここでできます。



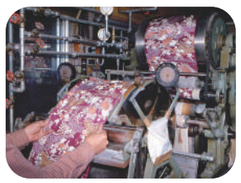
蒸し・揮発洗い・水洗

挿し友禅の色が落ちないようにするため改めて蒸しをし、揮発洗いでゴム糊を落とし、水で洗います。



湯のし

蒸気によって、縮んだ生地の幅を整え、シワを伸ばす作業です。これにより生地はみちがえるようにいきいきとして完成品となるのです。



完成

金箔や銀箔を使った金彩加工、そして色鮮やかな糸や金糸・銀糸を使った刺繍を行います。
また、紋付などフォーマルなきものには上絵技術という細い墨の線で描く特殊な技術で家紋を描きます。



型友禅の工程

図案

型彫り

図案にあわせて型紙を切り取って型を作ります。複雑な柄ほどたくさんの枚数の型を必要とします。



型置き

一枚の板に生地を張りつけ、その上に型を置いて、ヘラや刷毛を使って色を付けていきます。使う色の数などに応じて、型を替えながら何回もくりかえします。



地染め

蒸し

水洗

湯のし



完成

●京友禅協同組合連合会　TEL.075-255-4496

京焼・清水焼

京焼・清水焼は、自然の草花や風物をあらわした洗練された絵柄が特徴で、たいへん多くの種類が作られています。茶道具はもちろんのこと、わたしたちがふだん家庭で使っている食器などもそのひとつです。

京焼・清水焼の歴史

京都の焼物は、8世紀ごろ、現在の東山区のあたりで窯を使った土器の製造から始まりました。室町時代になって、釉薬による新しい技法が中国から伝来し、これにより、京焼・清水焼の元となる色あざやかな色絵陶器が誕生しました。これらは、茶道の普及によって広く使われるようになり、江戸時代になるといっそう盛んに作られました。とくに、清水寺の近くで作られていたものが多かったので、清水焼の名がついたといわれています。

このころに活躍した野々村仁清や尾形乾山といった名工たちの作品は、色も形も素晴らしく、その後の京焼・清水焼の発展に大きな影響を与えています。また、磁器の製作が始まったのもこのころで、さらに芸術性が高くなっていきました。

明治時代に入ると、伝統的な技法を守るだけでなく、機械を使った海外の技術を取り入れた近代的な工場生産も始まりました。これによって京焼・清水焼は全国の人々に知られるようになったのです。

京焼・清水焼のできるまで

土もみ

原料である土に、粘土や長石などをくわえたものを、手を使って練っていきます。



成形

回転する円盤の中心に土のかたまりを置き、遠心力を利用して形を作っていきます。



けずり仕上げ

生地が半乾きになったとき、金属製のへらでけずり、全体の形を整えます。



素焼

絵付けや釉薬(うわぐすり)かけに必要な強さにするため、600度から800度の窯で焼きます。



下絵付

筆を使って柄を描きます。



釉薬かけ

透明感や光沢を出すため、釉薬(うわぐすり)を塗ります。



本焼

釉薬かけしたものを窯に入れ、1200度から1300度の高温で焼き上げます。



上絵付／上絵焼成

美しさや豪華さを出すために、金・銀などの酸化物で彩色します。再度、低温で焼き上げます。



完成



職人さんのおもい

上絵付（お仕事について　14年）

小学生のころから絵を描いたり粘土で動物を作ったりすることが大好きでした。大人になったら自分の得意なことを仕事にしたいと考えていたので毎日楽しく絵付をしています。

伝統産業まめ知識

陶器と磁器のちがい

陶器は土を原料にしているけれど、磁器は陶石という石をくだいたものを原料に作られています。また、磁器は陶器よりも高い温度で焼くため、ガラス質がとけて表面がきれいに光り、陶器より固く仕上がります。



陶器



磁器



●京都陶磁器協同組合連合会 TEL.075-582-3113

京仏壇・京仏具

京都には、たくさんの寺院があります。仏具はそうした寺院で用いられている仏像や木魚、鐘などのことをいいます。それぞれの寺院を信仰している人(檀家)が、寺院へ行く代わりに毎日参拝できるよう、家庭に置いているのが仏壇です。

京仏壇・京仏具の歴史

仏教は6世紀に日本に伝来しました。その後、政治の中心であった奈良や京都では、つぎつぎに仏教寺院が建てられ、同時に仏具の生産も始まりました。平安時代になると京都では東寺・西寺といった大きな寺院ができるなど、ますます仏教は広がり、それとともに仏具の生産も増えていきました。その後仏具は、金工・漆工といった高度な技術を持った人たちの手によって、より豪華なものが作られるようになり、日本固有の仏具の形が確立していきました。

江戸時代になると、さまざまな宗派が庶民のあいだに広まっていきました。人々は、寺院へ行くだけでなく、家に仏壇を置いて信仰するようになりました。このころから、仏壇の生産が増え、多くの仏具師たちが活躍しました。

伝統産業まめ知識

どうやって組み立てられるの？

京仏壇・京仏具はくぎを一本も使わずに作られています。「ほぞ組」といわれる凹凸をそれぞれの結合部分に作り、はめ込んで組み立てます。

京仏壇・京仏具のできるまで

仏壇・仏具の技術は、木工や漆器といったほかの工芸品にもいかされているんだ。



京都の仏壇・仏具は、木工、彫刻、蒔絵など古くから京都に伝わるさまざまな技術を用いて作られています。

それぞれの工程を担当するのは経験豊かな職人さんたちで、昔から変わらぬ方法で一つ一つ手作業で作っていき、最後に組み立てて出来上がります。



漆を塗った表面を平らに磨いて光沢を出します。



仏壇の本体を作ります。

木地

屋根



仏様をお祀りする宮殿の屋根部分を、手作りした細かい部品を組み立てて作ります。

木彫刻



天女や人物、龍などの生き物や蓮や牡丹などの草木等、様々な図柄の彫刻を施します。

蝋色

漆塗



木の反りや割れを防ぐための下地の処理をし、表面を黒色や朱色などに塗り上げます。

純金箔押



漆を塗った上に、純金の箔を一枚ずつ貼りつけます。

錺金具



銅などの金属に柄を彫って、さらに純金で仕上げます。

蒔絵



漆などで描いた下絵に、金粉や銀粉、貝などで加工します。

彩色



絵具で唐草や花鳥等を描き入れたり、彫刻に色を付けたりします。

総合組立

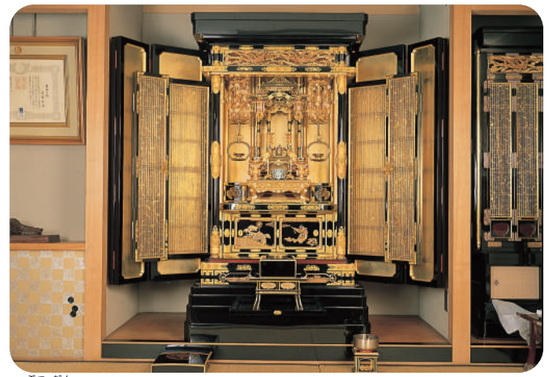


それぞれの工程を完了したものを集め、組み立てて完成品にします。

完成



仏具



仏壇

職人さんのおもい

金箔押（お仕事について 28年）

はじめは数分しか続かなかった「あぐら座り」の仕事も今では当たり前になりました。伝統産業の仕事は毎日のコツコツの積み重ねによって、素晴らしい作品が出来上がります。

●京都府仏具協同組合 TEL. 075-341-2426

清酒(日本酒)

日本の「伝統的酒造り」は、日本の恵まれた気候風土によって育まれたこうじ菌を使う独特の技術です。令和6(2024)年12月、「伝統的酒造り」はユネスコ無形文化遺産に登録されました。


昔ながらの酒造りも行われている

京都の清酒の歴史

京都では、酒造りに適した良質の地下水に恵まれていたので、平安京が造られたころから酒造りが始まったといわれ、室町時代にはたくさんの造り酒屋がありました。

特に京都の伏見では、伏流水(地下水)が豊富だったことから、質の良い清酒が造られるようになりました。安土桃山時代、豊臣秀吉が伏見城を築いたころから伏見は城下町として栄え、酒造りも盛んになりました。

江戸時代になると、伏見港の整備が進み、酒造りに必要なお米が三十石船などで運ばれてくるようになりました。産業としての酒造りが形成されたのはこのころで、多くの酒造メーカーが生まれました。

やがて明治時代になると、鉄道が開通し、「伏見の清酒」として全国に運ばれ、多くの人々に知れわたるようになったのです。そして今では、世界中で飲まれるようになりました。

伝統を守り伝える

清酒は、米の精米からはじまり、こうじづくり、発酵……といくつもの工程を通して造られます。

昔から、それらの作業は「蔵人」といわれる職人さんたちによる手作業で行われていました。また以前は、酒は米の収穫期や気温の低い冬の間しか造られませんでしたが、今ではむずかしい温度調節も機械で出来るようになり、一年を通して造られているところもあります。

しかし、酒造りには「こうじ」や「酵母」などの菌が必要です。これらは生き物ですから、いつも同じように出来るとはかぎりません。そこで活躍するのが職人さんたちのリーダー・杜氏です。杜氏は、原料となる米や水、また気候の変化などに注意し、こうじやもろみの状態をさわったり、においをかいだりしながらよく観察して、良い清酒に仕上げていきます。

京都の清酒には、杜氏によって守り伝えられてきた伝統的技法がいかされているのです。

職人さんのおもい

杜氏(お仕事について　56年)

これまでの経験を充分にいかして、子どもを育てるのと同じように、愛情をもってお酒の発酵管理を行い、従事者が協力し、力をあわせておいしいお酒を造っています。

伝統産業まめ知識

酒造りをささえる天然の地下水

伏見の清酒が生まれたのは、質の良い地下水に恵まれていたから。今も、伏見のあちらこちらには、名水といわれる地下水があります。御香宮神社の御香水もそのひとつで、今から千数百年前からわき出ていると言われています。



清酒(日本酒)のできるまで

京都市では、全国で初めて「日本酒で乾杯」を呼びかける条例を作りました。これからも日本酒を通じて日本の文化、伝統の大切さを伝えていきます!
※「京都市清酒の普及の促進に関する条例」(2013年施行)





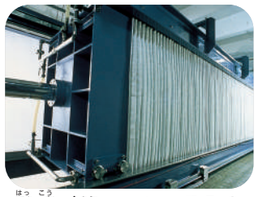

蒸した米に麹菌を植え、温度や湿度を調節しながら麹室のなかでこうじを作ります。

玄米 → 精米 → 蒸し米 → こうじづくり


大粒の玄米を精米し、まわりを削ってきれいな米(白米)にし、ていねいに洗い、蒸し米機で蒸します。
(左から玄米・70%まで削った白米・50%まで削った白米)

酒母づくり

酵母(こうじにより分解された原料の米に含まれるでんぷんの糖分を餌にして、アルコールを生成する微生物)を培養して大量に増殖させ、酒母を作ります。


発酵が終わったもろみをしぼって、清酒と酒かすに分けます。

もろみ仕込み


大量の酵母を含む酒母に、こうじ・水・蒸し米を加え、糖化とアルコール発酵を同時に行い、もろみを作ります。

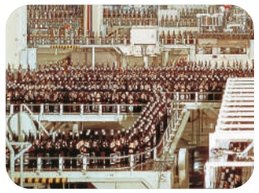
酒しぼり → 清酒 → ろ過 → 加熱殺菌 → 貯蔵 → 加熱殺菌・容器詰 → 完成

酒かす


酒蔵が残る伏見の町なみ


「きき酒」で味や香りを検査します


しぼった清酒を60～65度で加熱殺菌し、タンクに入れ一定期間熟成させて味や香りを整えます。


再び加熱殺菌し、びんなどに詰めて製品になります。



●伏見酒造組合 TEL.075-611-4115

このままでは、京都の伝統的な文化がなくなる!?

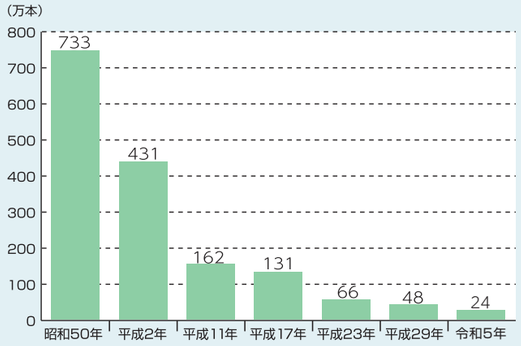


たくさんの「もの」に囲まれた現代では、一つのものを大切に長く使うという習慣がなくなってきています。豊富な「もの」は便利で豊かな生活を実現しました。昔は手仕事で一つ一つ心を込めて作っていたものでも、長いあいだの技術の積み重ねで、今は機械による大量生産ができるようになり、私たちの身のまわりにあふれています。

京都の伝統産業も生活スタイルの変化や、海外から値段の安い製品がたくさん輸入されるようになったことなどから、生産量や職人さんの数が少なくなり、仕事を続けていくことがむずかしくなってきています(下図参照)。京都の伝統産業は日本の文化を支える大切な役割を果たしています。伝統産業がなくなると、神社やお寺、お茶やお花、能、狂言に使う衣装や道具が京都では作られなくなり、これらの文化も続かなくなってしまいます。

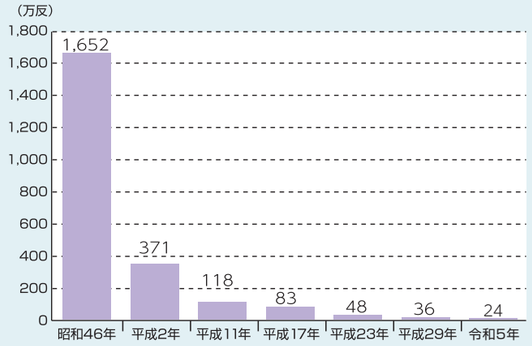
◆西陣織(帯)出荷量推移(単位：万本)

*出典「西陣生産概況」から



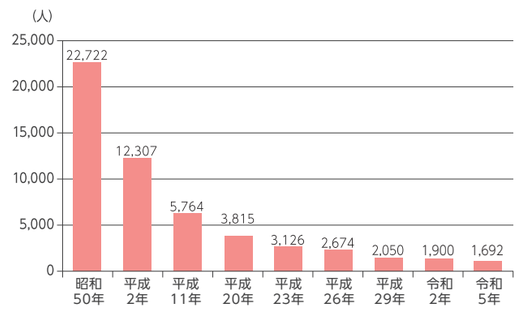
◆京友禅生産量(単位：万反)

*出典「京友禅京小紋生産量調査報告書」から



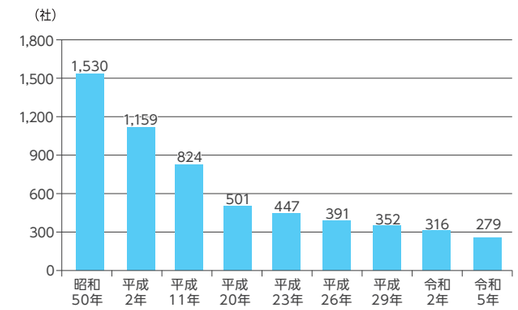
*出典「西陣機業調査報告書」から

西陣機業　従事者数推移



*出典「西陣生産概況」から

西陣機業　企業数推移



これからの伝統産業のために

京都市では伝統産業をもっと元気にするために「京都市伝統産業活性化推進条例」というきまりを作りました。

これは、みなさんに京都の伝統産業のことをもっとよく知ってもらうために学習の機会を作ったり、高度な技術や技法を受け継いでいく人(後継者)を育てたりして、京都の伝統産業を活性化させようというものです。

みなさんのまわりには、伝統の技を守りながら、新しい技術を取り入れた伝統産業製品が色々あります。これらを知ることも、京都の伝統産業を元気にする第一歩です。



ネクタイ(西陣織)



財布(京友禅)



京こま



伝統産業が元気になると

1. 京都の経済が発展する

京都を代表する産業として、伝統産業に関連した仕事につく人が増えることで、京都の経済が元気に発展することにつながります。

2.豊かな地域社会が生まれる

高い技術によって作られる衣装や道具など、歴史と文化に根ざした伝統産業製品は、暮らしに潤いを与えるとともに、時代を越えて受け継がれてきた京都の伝統行事を支えています。伝統産業を通じて、わたしたちの暮らしやまちに活気を与えます。

3.日本の伝統産業が活性化する

伝統と、新しいものを常に取り入れる姿勢によって育まれた京都の伝統産業の技術はとても高度なものです。国内の多くの伝統産業の中には、京都にその基礎を持つものも多くあります。京都の伝統産業を活性化させることは、日本全体の伝統産業を活性化させることにつながります。

もっと学ぼう！伝統産業！
実演や展示など、すべて学べるミュージアム！



京都伝統産業ミュージアム
公式キャラクター「ことまる」

京都伝統産業ミュージアム

「京都伝統産業ミュージアム」は、この本で紹介した数々の伝統産業製品を見ることができ、さわって学ぶことができる施設です。ぜひ一度訪れてみてくださいね。



●開館時間　午前10時～午後６時
（入館は午後5時30分まで）

●休 館 日　不定休（月2回程度）、年末年始

●観 覧 料　一　　般 500円　(20名以上の団体400円)
小中高生 400円　(20名以上の団体300円)
※未就学児は無料
※京都市内在住又は通学の小中高生及び
70歳以上の方は無料
※和装の方は無料

●住　　所　〒606-8343
京都市左京区岡崎成勝寺町9番地の1
京都市勧業館「みやこめっせ」地下1階

●電　　話　075-762-2670

●ホームページ　https://kmtc.jp



【伝統工芸プチ体験】

当日、予約不要で参加できる工芸体験もあります。
メニューは日替りで毎日実施しています。（有料）
画像付の説明を見ながら、自分で制作する体験です。
職人による指導はありません。
詳しくはホームページで。

【74CRAFTS WALL】



染織品から諸工芸品まで、京都市の伝統産業74品目がすべて並ぶ国内最大規模の展示スペース。動画で製造工程も見ることができます。

【74CRAFTS EXHIBITION】



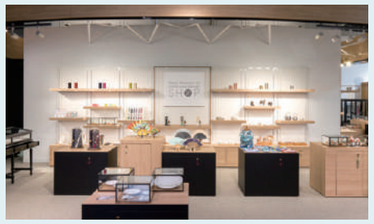
ものづくりの工程や技術・技法を肌で感じ、学び、楽しむための展示エリア。製造に使う素材や道具、職人の実演をとおした手仕事の細かさなど、伝統産業をより深く学ぶことができます。

【職人さんの実演】

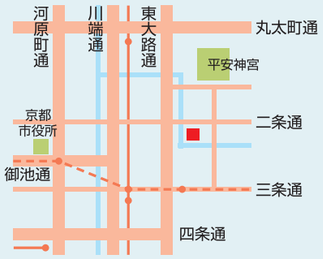


伝統産業の職人による実演を行っています。作業工程を間近で見ることができ、職人のお話を聞くことができます。詳しくはホームページで確認してください。

【ミュージアムショップ】



京都の伝統的な技術をいかして生み出された、暮らしによりそう道具や雑貨、アクセサリーなど様々な工芸品を取り揃えています。



交通アクセス

東山駅から	地下鉄 東西線「東山駅」から徒歩約10分
京都駅から	市バス 5・105・EX100系統「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車
	市バス 206系統「東山二条・岡崎公園口」下車
四条河原町から	市バス 5・105系統「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車
	市バス 32・46系統「岡崎公園 ロームシアター京都・みやこめっせ前」下車
	市バス 31・201・203系統「東山二条・岡崎公園口」下車
三条京阪から	市バス 5・105系統「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車

クイズ 答え



